

伝統工芸の名匠

備前焼
伊勢崎淳の挑戦

—伝統と革新のはざまで—



作家・伊勢崎淳を育んだもの

金子賢治（東京国立近代美術館工芸課長）

今を遡ること約1千年前から窯焚きの煙の絶えたことがない備前。そこで平安時代から無釉の焼締陶器が作られ始めた。素朴な初期の日常雑器から、利休にも大変好まれた桃山時代の華麗な茶陶の時期を経て、幾多の困難にも耐えて現在まで営々と続いてきたのが備前焼である。こうした長い歴史を持つ産地、それを基盤にして芸術としての陶磁器作品を制作する陶芸家集団の一大拠点。それが現代の備前である。

伊勢崎淳は文字通りそのリーダーである。父・陽山に学び、長大な時間をかけて蓄積されてきた備前の技法・材料・思想・様式などを養分として、陶芸家としてのキャリアを積んできた。平成16年、重要無形文化財「備前焼」保持者（人間国宝）に認定されている。

こうした産地と作家の関係は、手作り産業を根絶やしにして工業化した欧米では全く考えられないことで、陶芸大国といわれる揺るぎ無い地位を作り出してきた日本の特徴である。しかしこれはただ単に産地の伝統を平々凡々と受け入れていけばいいと言うものではない。常に現代作家としてのオリジナリティーの創造が要求される厳しい世界でもある。

伊勢崎淳はそのことを誰よりも深刻に認識してきた作家の一人である。彼が親しんできた友人や美術の世界は、彼の志向がどのようなものであったかを示して余りある。そしてそれは彼の造形思考の養分となり、優れた作品を次々と作りしめていったのである。

今回の映画は、伊勢崎淳の作家としての背景をなす、備前の歴史のエッセンス、現代造形としての思考のプロセス、そして備前のリーダーとしての後進の育成などを描くものである。そのことによってこれからの日本の現代陶芸の未来に何らかの寄与ができれば幸いである。



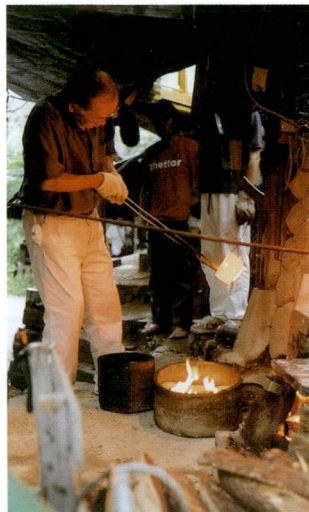
採取した土の塊を数十年分は確保



一窯約1500~2000束の赤松を使用



備前焼では「窯詰めで窯を焼け」といわれ、どこに詰めれば焼けはこうなるという原理がある



途中、粗殻で蒸し焼きにして器肌に黒い色合いを生む(引き出し)

「伊勢崎淳さんの造形と色」

有泉 寧（映像監督）

伊勢崎さんの代表作「完全黒体」が好きだ。網膜剥離の不安な気持ちを形にしたという。備前焼の常識を吹き飛ばしてしまったような圧倒的な存在感。私はその迫力の前にしばし言葉を失った。この伊勢崎さんの造形はどのようにして生まれるのか。それを探りたいと考え、特に力を入れて撮影に臨んだ。

そして黒と金の発色。特に黒を出すために、伊勢崎さんは何度も試行錯誤を繰り返したそう。炎の偶然性だけで生まれる色にしたいくない。その時、伊勢崎さんのしたことは、我々スタッフの間で「これが備前か？」と疑問にすら感じさせる斬新なものだった。その一方で、「穴窯」という古備前以来の窯を復活させ使い続けるほどの保守派(?)でもある。

伝統工芸とは一体何なのか。伊勢崎さんが繰り返す「形と色」の創作活動の映像は、そんな疑問に一つの答を見いだしてくれていると思う。

伊勢崎さんの黒は、伊勢崎さんにとってライフワークとなるに違いない。そう思った私は「この手法が伝統として残るといいですね」と聞いてみた。すると、伊勢崎さんは厳しいまなざしで即答した。「残らなくなってもいいんです。自分の感性にあったものを作ればいい」そして、まなざしを和らげて付け加える。「どういものから新しい伝統が生まれて来るかは、わかりませんよ」

日々研ぎ澄まされる現代的な感性で、伝統に挑み続けることが新しい伝統——。

転換期にある備前焼に、その情熱を傾ける芸術家の生き様を感じていただくことができれば幸いである。



網膜剥離の手術後に制作したオブジェ作品
「黒い太陽」(後の「完全黒体」)

氏の特異な造形感覚を物語る黒備前が強調された「黒角花生」



引き出しによって生み出された「備前黒茶筌」



緋襷と呼ばれる緋色の美しい線が現れた「大皿」と「黒角皿」



レリーフ状の線条文が特長で、窯変が計算された「壺」

伝統文化シネマ第44作品 〈伝統工芸の名匠シリーズ〉

備前焼 伊勢崎清の挑戦

—伝統と革新のはざまで—
(HD 作品 / 33分)

- ・企画：財団法人 ポーラ伝統文化振興財団
- ・製作：株式会社 日経映像
- ・監修：金子賢治（東京国立近代美術館工芸課長）

〈製作スタッフ〉

製作 佐野 文男
脚本・監督 有泉 寧
撮影 大手 洋行
照明 古屋 熱
助監督 草野 顕人
VE 山森 義明
編集 横山 義弘（東京テレビセンター）
MA 門倉 徹（東京テレビセンター）
音楽・効果 山崎 茂之（音響企画）
語り 井川比佐志

〈撮影協力〉 岡山県立博物館
黒住教本部
瀬戸内市教育委員会
倉敷芸術科学大学
山陽新聞社
銀座・黒田陶苑
北野天満宮



S35年、父・陽山によって凡そ100年ぶりに復活した穴窯



板づくりに全神経が注がれる



居間に飾られている氏独特の作品群



轆轤でも高度な技が展開される

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture
財団法人 ポーラ伝統文化振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル2階
TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597